たのかもしれない。著者らが真偽不明の報道として伝えるところによると，フルシチョフはフィデルと会見したのち，「フィデルが共産主義者であるかどうかは不明だが，自分がフィデル党であることだけはたしかである」と語ったという。

第4に，しかし革命は，そうしておそらく革命を伴わない低開発社会からの「脱出」さえも，1人のカリスマの力のみによっては可能ではない。反対にカリスマとは，その条件として大衆の熱意を結集して一定の方向にさし向けうる魅力のある者でなくてはならない。著者らの記述によれば，フィデルらの革命軍が政府軍に敗れて，一時は12名となった仲間がシェラ・マエストラの山中にこもった時以来，かれらを救い，助け，やがて革命軍に加わってバチスタ政権を打倒する勢力となった中核は一貫して農民であった。革命を欲するほどに——とはいえ農民自身は革命を発想はしなかったが——しいたげられていた国民の大部分は季節的賃金労働者としての農民であったという事実から，フィデルはこの階級をもっとも身近な味方とし，かつ「合理的ヒューマニズム」の多くの具体的活動を通じてかれらの信頼を獲得していった。このことは革命——そうして take-off 一般もそうであろうが——がいかに幅広い大衆を基盤とし，かつその熱意を動員するためにはいかに巧妙な戦術が構成されなくてはならないかを示しているように思われる。

第5に，本書の後半では，反革命運動と関連して，米国の帝国主義的政策がいかに中南米国民の利益を妨げ，米国独占資本が国策を動かしていかに米国を破滅の淵においやってゆくかが間接に示されている。こうした記述はいかにもマルクシズム的な感じがし，一部の読者におそらく最大の抵抗を感じさせる部分であると思われる。しかし論証の過程はどうあろうとも，中南米での米国の政策が現にかならずしも成功していないということは事実であり，資本主義者といえどもこの記述から学ぶべきところは多いと思われる。

以上わずかな問題にかぎって本書の内容の一部を紹介したが，それは本書が経済発展の問題に関してもつ含蓄をすべて説明するにはほど遠く，まして本書のもつヒロイズム的ふんい気や西部劇的痛快さはその一部すら伝えようがなかった。この本は寝ころんでいても読める。しかしあらゆる意味で第一級の読物であることはまちがいない。

（調査研究第二部所員　小出厚之助）

S・ボスキー著

『開発銀行の業務とその諸問題』

Shirley Boskey. *Problems and Practices of Development Banks.* Published for the International Bank for Reconstruction and Development. Baltimore: Johns Hopkins Press, 1959. xi+201 p.

世界銀行は低開発国の経済発展およびこれらの国に設立された開発銀行，さらに先進国の開発銀行の業務に資するため，各種の出版物を刊行している。本書は W. Diamond の *Development Banks* についで，各国の開発銀行について論じたものである。

前著と本書との比較を述べれば，前者は開発銀行の目的や機能を解明しようと努めたやや理論的色彩の濃いものであるのに対し，本書は各国の開発銀行が経験した諸問題とそこで採用された解決方法のなかから一般に共通すると思われる課題を摘出し，それに解答を与えるという方法でかかれたやや実践的色彩の濃いものである。

1958年5月，世界銀行は12カ国の開発銀行担当者および International Finance Corporation からの職員を招いて開発銀行が当面する問題を討議する会議を開催した。本書の素材はその多くをこの会議の討論から得たものである。

リロ・リンケ著

『コントラストの国エクアドル』

Lilo Linke. *Ecuador: Country of Contrasts.* London: Oxford University Press, 1960. x+193 p.

その名の示すとおりエクアドルは赤道直下，ラテンアメリカ諸国中最小の共和国である。著者は，各種の政府機関に加わり，中央銀行に協力して過去15年間この国に住み，国のすみずみまで旅をした。豊かな経歴をもつ著者が，地理，住民，歴史，政治，政党，憲法，インディアン問題，社会階級，衛生，教育，文学と芸術，宗教，交通，生産活動，財政金融，国家財政，対外関係，軍隊と，この国のあらゆる問題を概観したのが本書である。

赤道直下の沿岸地帯でも，海抜何千メートルにも達するシエラ山脈帯でも，ともに生存のための闘争は厳しい。科学と教育がその闘争を漸次緩和してはいる。だが住みよい国や進んだ国の状態に追いつくまでには前途ほど遠い。その主たる障害は何か——著者は本書の中でこれを探る。そして人的な障害も自然の課せるそれもすべては克服不可能なものではない。いまやこの国の秘められた可能性は開発されるのを待っている——と結論する。

C・S・シャウプほか共著

『ベネズエラの財政制度』

C. S. Shoup and Others. *The Fiscal System of Venezuela*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1959. 491 p.

本書はコロンビア大学の経済学教授シャウプ氏を団長とする英米両国の学者調査団がベネズエラ政府の要請に基づき当国の財政構造を分析し政府に提出した報告書である。報告は所得税と所得税行政，関税，国税と地方税，ガソリン税などの改革を主要点としている。全16章のうち1～2章では当国の租税制度のBackgroundである国家経済全体を分析し，3～11章では個々の租税およびその行政について評論している。12章は国税と地方税について，13章は税制と経済安定との関連について，14章はベネズエラの国家会計について論じている。本報告はベネズエラ経済について知ろうとする者には1～3章が，またいっそう専門的に各国の財政構造を比較研究しようとする者にはその他の部分が有益である。ベネズエラが南アメリカの後進的経済構造をもち，かつ国家経済の大半が石油利権でささえられていることから必然的に生まれてくる財政の特殊構造がよく描かれている。

S・S・ハリソン著

『インド——その最も危険な時期』

Selig S. Harrison. *Jndia: The Most Dangerous Decades*. Princeton: Princeton Univ. Press, 1960. 350 p.

本書はインドがネルー以後の時代に単一国家として果たして存在しうるかという問題を提起し，この時期がインドにとって「最も危険な時期」(Most Dangerous Decades) であるとする。ここにいう decades とは低開発国が進歩発展の希望を見いだしてから，その進歩発展が増大する欲求に見合うに至るまでのそれである。この時期においてインドの場合特に問題となるのは言語，カースト，共産主義その他の政治的・社会的・文化的諸要因である。政治・教育用語としての英語は10に区分されるインド諸言語によって代位され分割される潜在的可能性を内包している。カーストは言語的差異を強化し，経済的・社会的闘争の基盤となりうるものである。インド共産主義がこうした divisive forces を利用せんとすることはいうまでもなかろう。本書はインドを理解するに際して，このような政治的諸極端の間の相互分解作用に対する認識を新たにすべきであるとするのである。

F・モラエス著

『現代インド』

F. Moraes. *India Today*. New York: McMillan Co., 1960. i+248 p.

著者は *Express* の主筆。独立後のインドの当面している諸問題の概説書である。まず過去12年間は過去5000年と切り離すことはできないという観点から，その社会・宗教・政治の歴史的背景を明らかにしようとする。長い歴史を通じて形成されてきた経済的後進性，社会構造の硬直性，民衆の無知を明確にすべく歴史をリアリスティックに描く。後半，ガンジー時代の章でかれに時代錯誤的アプローチのあったことを指摘しつつその業績と遺産を評価し，ケララ問題ではその背景を分析し，またネルーやその他の政治家を俎上にのせネルーの後継者を予想し，5カ年計画，外交のことなど内容は広くそれぞれにつき明確な観点を持つ。術語も政治的観点もヨーロッパ的であるが，東（神とともにあるという精神）と西（科学）の総合によって，世界の進歩と平和と統一が達成できると説いている。

J・C・ド・グラフトジョンソン著

『アフリカ経済入門』

J. C. De Graft-Johnson. *An Introduction to the African Economy*. Bombay: Asia Publishing House, 1959. 115 p.

本書はアフリカ人である著者のニューデリー大学におけるアフリカ経済についての講義録である。全体4部に分かれていて，最初の1～2部ではアフリカの人口および農業問題を取り扱い，アフリカの自然条件が一般に考えられているほど農業に不適でないこと，さらにアフリカ特有の土地制度が生産力増大を阻害したため，70%以上の農業人口があるにもかかわらず食糧問題は解決されていないことを実際の資料により論証している。第3部ではヨーロッパ資本の進出によって在来の工業の発達は阻止され，第1次産業と鉱業に偏重する経済構造に釘付けられたことが経済発展の重大な阻害要因であると強調している。かれの主要な論点は経済発展のこれらの諸困難の解決にはまず農業問題が解決されねばならない，そののちに工業化への道が開かれるというにある。その工業化のための政府の役割，開発資金の問題，民衆の態度などにつき概論的な説明がなされている。